

# 近代趣味人の美意識

— 第11代西尾與右衛門の世界 —

会期:平成26(2014)年4月26日(土)～6月1日(日)



上田耕冲「三社図」 明治37(1904)年

旧吹田村に位置した西尾家は、江戸時代、仙洞御料という上皇領の庄屋を務めていました。明治期後半になると農業経営のほかに山林経営も始めています。そんな西尾家の文化的活動を代表するのが11代当主・與右衛門義成(1863～1925年)です。與右衛門は、漢学を藤澤南岳に学び、画家らとも交流しました。また、茶道藪内流10代休々斎竹翠の門に入って、茶道に傾倒し、藪内節庵が提唱した篠園会という茶会を通して、野村得庵や貴志弥右衛門など近代の財界人らと知遇を得ました。その数寄の心は、現在の旧西尾家住宅(国重要文化財)や自らの号を冠した茶室・積翠庵(藪内流燕庵写)のほか、與右衛門が所蔵した絵画や茶道具の数々などからも窺い知ることができます。本展では、初公開となる西尾家に伝わる多くの書画や工芸品などの展観を通して、近代に生きた趣味人・11代西尾與右衛門の美意識に触れたいと思います。(寺澤慎吾)

# 西尾與右衛門と西尾家の絵画

## 第11代 西尾與右衛門

まずは、本展覧会の主役、第11代西尾與右衛門についてご紹介いたしましょう。西尾家では代々“與右衛門”を襲名しています。以後、特記しない限り「與右衛門」は11代を指すこととします。

與右衛門は、幕末の文久3（1863）年7月14日、仙洞御料の庄屋を務めた西尾家の長男として生を受けました（幼名は核吉<sup>たねきち</sup>）。しかし、明治9（1876）年に父が亡くなり、13歳にして家名を継いで、11代西尾與右衛門を名乗ることになります。以後、明治の混乱期を乗り越え、一家の柱として、西尾の家を守っていきます。

家長・與右衛門の仕事として、まず顕著なものは、本宅をはじめ、土蔵や納屋など、現在まで残る西尾家住宅の主要部分の新築や修築を行ったことでしょう。明治44（1911）年には、家憲及び家憲細則を制定しており、堅実に家業（農業）の伝統を守る姿が窺えます。

一方で、数寄者としての面では、父と同様、茶道は藪内流を修め（藪内流第10代休々斎竹翠に入門）、明治26（1893）年に、藪内茶室燕庵の写しである積翠庵、及び雲脚写を建築しています。また、藪内節庵が提唱した茶会“篠園会”の初期メンバーであり、第1回の当番も務めています。與

右衛門の娘たちは、関西の財界人のもとへ嫁いでいますが、茶会などの交流から生まれた関係を通じて縁組がなされていったのでしょうか。さらに、掛け軸や茶道具類は與右衛門が購入あるいは直接的に関与して作られたものも多数あります。そうした美術品からは、與右衛門の好み、美意識が伝わってきます。

## 西尾家の絵画

西尾家には多くの絵画が伝わっていますが、特に円山・四条派の絵画と文人画が目立っています。制作年代や箱書き等の情報から、そのうちの多くは11代與右衛門が収集したものであることが分かります。茶室や床の間などで、季節の移り変わりに合わせて掛物を替えていたのでしょうか。



旧西尾家住宅主屋に残る上田耕冲・耕甫の絵画。

〔図1〕㊤上田耕冲「花卉図板絵」（水屋天袋）

〔図2〕㊦上田耕甫「富士図襖絵」（味々庵）。



上田耕甫  
「松に鶴図」  
大正9（1920）年

## 円山・四条派の絵画

円山応挙にはじまる円山派、応挙に学んだ呉春からはじまった四条派は、ともに写生を重視した画風をもち、円山・四条派と称されます。円山派は、日本の伝統的な装飾画に写実的な画風を備え、四条派はそこへ洒脱味を加えて抒情性のある画風を作り上げました。彼らは、江戸時代中期以来、京都を中心に発展し、大坂でも上田耕夫、長山孔寅、上田公長、西山芳園らが活躍しています。

## 上田耕冲・耕甫父子

中でも與右衛門と同時代に活躍している上田耕冲、耕甫父子の絵画は多く残されています。與右衛門が修築した主屋の水屋天袋〔図1〕や味々庵襖絵〔図2〕にも彼らの絵を採用していることから、愛好していた様子が窺えるでしょう。

上田耕冲（1819～1911年）は、近代の大坂を活躍の場としました。円山応挙の高弟・上田耕夫の子であり、父と四条派画家・長山孔寅に絵を学んだとされます。大坂の豪商平野屋五兵



西山芳園  
「桃に小禽図」



上島鳳山  
「野猪図」

衛の後援などを受けながら画作をし、明治17（1884）年に私立浪華画学校が開校された時には、日本画の教員となって、後進の指導にあたりました。

上田耕甫（1860～1944年）は、耕冲の子で、同じく四条派を学んでいます。住友財閥の住友吉左衛門や野村財閥の野村徳七など関西財界人たちと関係をもち、展覧会へ出品する作品を制作するというよりは、茶会など室内で鑑賞するための作品を多く描いた画家であったようです。

## その他の円山・四条派画家

西尾家にはその他にも、上田耕冲の弟子・庭山耕園の屏風、呉春の弟・景文に学んだ西山芳園（左図）、その孫弟子にあたる上島鳳山など、大阪で活躍した画家の作品が伝わっています。  
（寺澤慎吾）

## 西尾家の文人画家作品

日本の文人画（南画）は、詩・書・画といった教養を備えた中国の“文人”の絵に倣って描かれた絵画です。西尾家には、吹田ゆかりの金子雪操や田能村直入、その弟子筋など、文人画家の作品もあります。

### 金子雪操

金子雪操（1794～1857年）は、江戸後期の大坂で活躍した文人画家で、吹田にも数年間滞在したとされています。彼の作品は、昨年当館企画展で出陳したように、旧庄屋家である気比家旧蔵（現当館蔵）の作品群が知られていますが、市内の他の旧家などにも多くの作品が残っています。西尾家所蔵の雪操作品には、明治大正期に與右衛門が入手したと考えられる作品がありますが、吹田では、雪操の作品を持つことが、一つのステータスになっていたのかもしれませんが、雪操「玉堂富貴図」（下図）は、款記



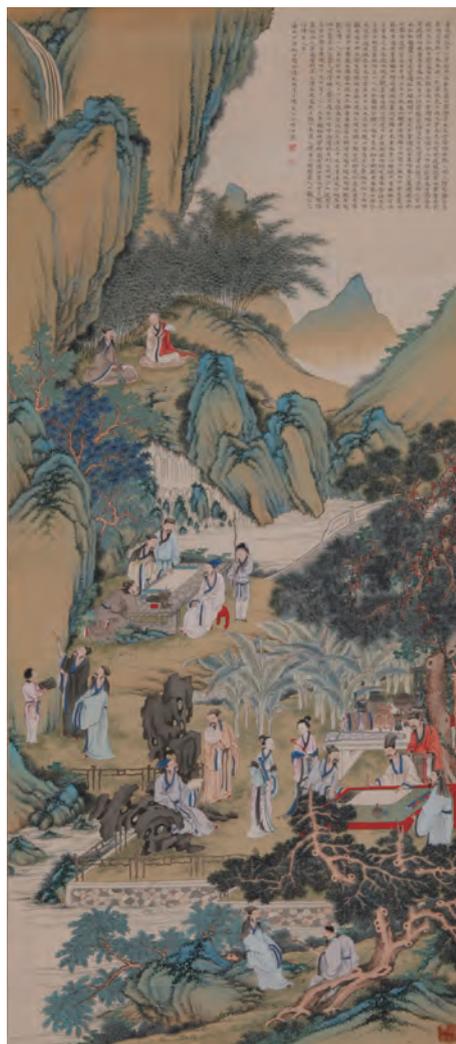
金子雪操  
「玉堂富貴図」  
天保8（1837）年

に「翠坵」（吹田）で描いた旨があり、雪操の吹田滞在中に描かれたと考えられる貴重な作品です。

### 田能村直入

田能村直入（1814～1907年）は、文人画家・田能村竹田の養嗣子で、江戸後期から明治期に活躍しました。養父・竹田は、各地を遍歴しましたが、晩年には、吹田の旗本代官井内氏に誘われ、吹田にも滞在しました。直入も竹田に従って京阪を遊歴しており、大塩平八郎の私塾・洗心洞に入ったり、煎茶会を開いたり、数多の文化人と交流しています。

明治29（1896）年には、富岡鉄斎らと「日本南画協会」を設立し、文人画家達の集まりの場を作ります。のちには、協会の吹田支部まで結成されたといえます。その関係からか、直入やその弟子の作品も市内に見られます。



田能村直入  
「琴棋書画図」  
嘉永7（1854）年

## 與右衛門の交友と茶道具～陶磁器を中心に～

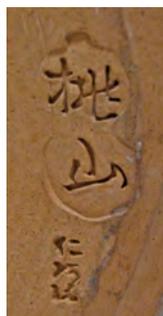
### 西尾與右衛門の交友

西尾家と茶道藪内流のつながりは、少なくとも先代10代の頃よりあったようです。與右衛門自身は、明治12(1879)年、15歳の時に藪内流10代休々斎竹翠に入門しています。同26(1893)年には、初伝を受け(免許皆伝は大正2(1913)年のこととされます)、さらに自らの号を冠した積翠庵(燕庵写し)及び雲脚写しの茶室を建築しました。積翠庵周りの庭は休々斎竹翠作とされています(なお、この庭を含めた旧西尾氏庭園は、昨年8月、国登録記念物として登録されました)。

明治41(1908)年には、藪内節庵(10代休々斎竹翠の養子で11代透月斎竹窓の弟)が発会した茶会「篠園会」に参加しました。篠園会には、娘婿・貴志奈良二郎や同じく娘婿・山口吉郎兵衛、朝日新聞創業者・村山龍平、同じく上野理一、野村證券創業者・野村徳七ら当時の実業界の面々が名を連ねていました。

このような藪内流や篠園会のメンバーとお茶を介した交流があったことは、與右衛門の所蔵品からも窺えます。休々斎や節庵の好み物、篠園会の茶会100回記念の絵画、與右衛門の孫の初節句に贈られた人形、節庵や野村徳七(得庵)の作品(右図)など、箱書き等から與右衛門の交友関係が知ることができる資料がいくつか残っています。

野村得庵「旭日図」  
大正11(1922)年

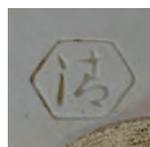


仁阿弥道八作、田辺玄々画「靈芝図水指」

### 西尾家の陶磁器

與右衛門が茶道に傾倒したことから、西尾家には多くの茶道具が伝わっています。本展でも、陶磁器や神戸雪汀の蒔絵作品を出陳します。江戸後期の陶工・仁阿弥道八の作品もありますが(上図)、やはり主たるものは、明治から大正にかけての與右衛門の時代の作品です。中でも5代清水六兵衛(1875～1959年)の作品は、與右衛門も好んだようで、温和な作風のもので幾つか所蔵されます。

5代清水六兵衛は、4代の長男として京都で生まれ、絵を幸野楳嶺に学び、一方で作陶では積極的に釉薬や製陶技法を研究、また、浅井忠らとともに陶器図案研究なども進めました。西尾家には、5代六兵衛がつくり、與右衛門(下図)や藪内節庵が書した茶碗などが伝わっています。(寺澤慎吾)



清水六兵衛(5代)作、  
西尾與右衛門(積翠)書  
「御本茶碗」  
大正13(1924)年

P1～5の西尾家資料写真については  
撮影・梅原章一氏(陶器以外)

# 西尾家に伝わった文化財の調査と公開

## 資料調査の概要

重要文化財旧西尾家住宅は、吹田文化創造交流館として平成17(2005)年10月1日から一般公開されています。以後、市教育委員会による総合学術調査を経て、平成21(2009)年12月に重要文化財に指定され、現在まで市民ボランティアグループの活動を織り込みつつ、来館者を迎えてきました。さらに昨年には庭園が新たに登録記念物(名勝)になりました。

このような文化財学習施設としての活動に加えて、平成23(2011)年10月からは西尾家所蔵資料の調査が始まりました。その内訳は、絵画・書跡・茶道具・人形・古文書・衣装類・家具調度品など多岐に及び、調査は現在も進められています。旧西尾家住宅は「近代和風建築」と評価されるように、明治中期～昭和初期に至るまで順次整備された建造物・庭園を中核とし、また、茶道藪内流を修めた近代茶家でもあって、所蔵資料の内容もその性格を強く表していると言えます。

## 資料の一般公開

調査の進展にあわせて、その成果一部を公開してきました。西尾家に伝えられてきた美術工芸資料や生活資料は、本来的に使われてきた場で公開すべきであろうとの視点から、一定のテーマを設定して、主座敷を使った特別展の形でステージ展示を行い、特に調湿や保護を必要とする資料は、ケース展示による陳列という手法をとりました。



特別展「蒔絵師神戸雪汀と西尾家」展示風景

## 第1回小さな特別展 蒔絵師神戸雪汀と西尾家

会期を平成24(2012)年3月17日から4月8日とし、当住宅で初めての本格的な美術工芸展となりました。神戸雪汀は旧加賀藩士の長男として明治8年に金沢で生まれ、蒔絵師としての修業を積み、やがて京都・大阪に出て蒔絵を研鑽、あわせて読書・謡曲を好み、茶華道を修め、陶磁器の収集家でもあったと『続浪華摘英』(大正5年刊)にあります。



蒔絵作品展示風景

雪汀は茶人との交流を介して西尾家との交わりがあったとみられ、古い作品として、大正4年の「鳳凰蒔絵八角盆」が当家に伝わっています。さらに、雪汀は昭和初期から戦後間もない頃まで西尾家の内部支配人として招かれ、当家の財産管理や茶事、文人の接客等を任され、また、内本町3丁目に工房を構えて制作に励みました。そのため、西尾家や周辺の茶道家には雪汀作品が伝わっています。



農夫文様平棗

作風として伝統的な絵柄を描く一方、猿・蟹<sup>かに</sup>や鯰<sup>なます</sup>、農夫やフクロウを、孫にせがまれてバンビを描くなど自由な画題を求め、彩色にも中間色を多く使っています。特別展では、大正期から91歳の作品までを展示、市民や茶道家など699人の観覧者がありました。

### 第2回小さな特別展 西尾家に伝わった人形たち

会期を平成25(2013)年3月17日から4月8日とし、西尾家に伝わった近代人形を公開しました。近世期に流行った人形を贈答する習慣は、やがて明治期以降は地域の富豪層に受け継がれ、子の誕生にあわせた雛人形や五月人形の贈答が盛んに行われました。

西尾家に伝わった人形は、明治中期から昭和初期に至るもので、第11代與右衛門義成夫人と第12代愛太郎夫人の子供の誕生にあわせて集中的にみられ、抱き人形や雛人形・五月人形があり、京人形の名工である大木平藏四世の作が多くみられます。人形の主題は神功皇后や武内宿禰、加藤清正など、神話や歴史で知られた人物像が主体で、戦前の教育を窺い知ることが出来ます。期間中1131人の観覧者がありました。



五月人形の展示



舞踊人形(狸々・草子洗小町・静御前)



雛人形の展示

### 第3回小さな特別展 西尾家に伝わった着物と髪飾り

西尾家に伝わる着物類調査は昨年秋から始められました。婚礼衣装、能装束<sup>しょうぞく</sup>、儀式用装束、また襦袢<sup>じゆばん</sup>、羽織<sup>はおり</sup>、コート、袱紗<sup>ふくさ</sup>、髪飾りなどが調査され、その成果を公開する特別展が、会期を平成26(2014)年3月15日から4月13日として開催されています。



ポーズ人形

婚礼衣装としては、文久年間の第10代與右衛門夫人から、第11・12・13代夫人の打掛<sup>うちかけ</sup>や振袖<sup>ふりそで</sup>があり、また、幕末とみられる搔卷布団も、婚礼用衣装を仕立て直したものとみられます。

能衣装も特筆されるもので、第9・10代当主は能をたしなんだと伝えられ、江戸後期の唐織<sup>からおり</sup>2領と長絹<sup>ちやうけん</sup>があり、女舞を演じていたようです。

楽器としては小鼓と太鼓が伝えられ、享和三(1803)年から安政四(1857)年に至る大蔵流小鼓や金春流太鼓の入門書や免状があります。舞いと楽器の修練は一連のこととして捉えられていたようです。

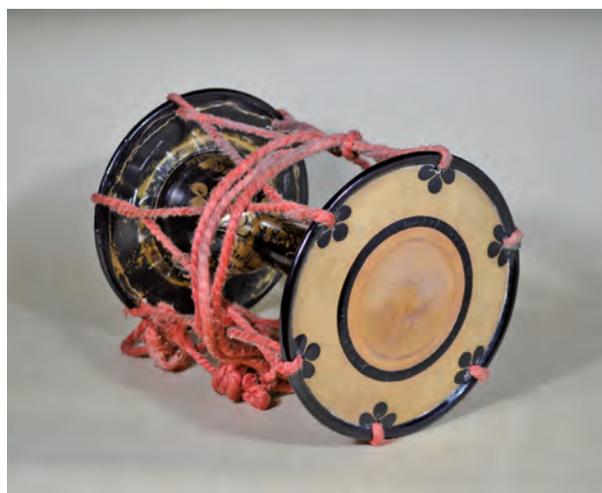
着物のなかには10代夫人の縦揚羽に始まり、水仙・柏紋などの女家紋をつけているものがあります。関西では夫人から娘へと女系によって女家紋は伝承されてきました。

着物以外の染織工芸品としては、多数の袱紗があります。袱紗は風呂敷を小型にした方形生地で、四方に飾り房がつき、表に家紋、裏に様々な意匠を描き、贈答品に掛けて使われました。幕末～昭和初期に至る袱紗があり、婚礼・節句・四季・祝事などの場の贈答習慣に関係したものです。その他、簞笥、鏡立て、髪飾り、図案帖、写真などもあわせて展示し、西尾家の衣装文化を多角的に捉える展示です。

(藤原 学)



段替花車御簾文様唐織



小鼓



紺緋子地御所解文様打掛



衣装見せ風景 (昭和18年)



白緋子紗綾形御簾文様着物

# えさかいせきしゅつど せきせいおびかざ 榎坂遺跡出土の石製帯飾りについて

榎坂遺跡は江坂町3丁目一帯に所在する弥生～室町時代の集落遺跡です。これまでの調査で古墳時代の竪穴建物、ピット、土坑等、平安時代の溝、井戸、ピット等、中世の溝、井戸、土坑等が見つかっています。

平成24(2013)年11月に行われました榎坂遺跡第10次調査で、地表下約1.3mの第3次面(平安時代)の溝8で石製帯飾りが出土しました。これは平面方形で断面台形の形状をし、遺存長1.9cm、遺存幅1.7cm、厚さ0.7cmを測り、表面は平滑で光沢があり、裏面はややざらついています。裏面には直径2mmの円形の孔が二つ並んであけられ、潜り孔となっています。色調は灰白色で材質は紀ノ川下流域に産出する石英質片岩(奥田尚氏ご教示)です。石製帯飾りは奈良時代以降の官人の制服のベルトに方形の巡方、楕円形の丸鞆を配列したもので、今回のものは巡方に当たります。

古代の官人の帯は『衣服令』等で官位により厳密に定められており、この石は『延喜式』に記載のある「紀伊石帯の白皙」に相当すると考えられます。「紀伊石帯の白皙」は六位以下の使用が禁じられていることから、五位以上の官人のものであった可能性があります。なお、第6次調査では類似資料として銅製の帯飾りも出土している他、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁、瓦、銭貨(皇朝十二銭)、水晶等も出土して

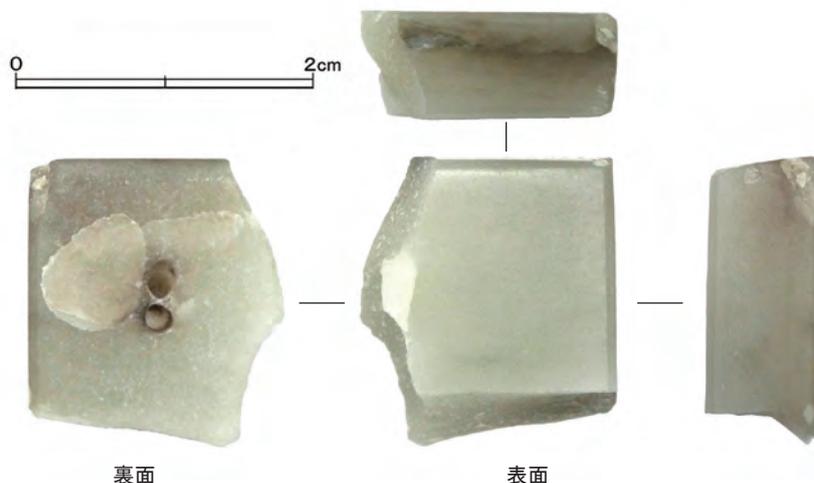
いることから、公的機関など通常の集落遺跡にとどまらない遺跡である可能性があります。  
(西本安秀)



石製帯飾りの出土した溝(平安時代)



石製帯飾り出土状態



石製帯飾り



当館が事務局をつとめる北大阪ミュージアム・ネットワークのメンバーとして、また美術の特別展などでもご講演をいただくなどたいへんお世話になっている大阪大学総合学術博物館の橋爪節也館長に、大学博物館やネットワークのこと、次回の西尾家展のことなどについてお話をうかがいました。

### 橋爪節也（はしづめせつや）

大阪市立近代美術館建設準備室学芸員などを経て、現在大阪大学総合学術博物館館長、大阪大学大学院文学研究科教授。専門は日本近世・近代絵画史。



**中牧館長：**まず最初に大阪大学総合学術博物館についてPRも兼ねてお話しいただけますか。

**橋爪館長：**大阪大学総合学術博物館は旧帝大の中で、最後にできた大学附属博物館です。平成19年（2007年）に「待兼山修学館」に展示室ができました。適塾、懐徳堂まぢかねやまの伝統を引き継ぎ、大学が保管している膨大な資料を保存して整理する役目と、大学の歴史を学生に伝え、地域と交流し、情報を発信するという使命を担っています。

**中牧館長：**展示としてはマチカネワニが目玉ですが、多くの学部に分散していたさまざまな資料をとりまとめ、一部はここに保管しているんですか。

**橋爪館長：**館藏品で有名なものはマチカネワニの化石です。今年は発掘されて50年目の記念すべき年です。また緒方洪庵の適塾の資料も預かっています。北浜の適塾の蔵で保管されていたのですが、大学に高機能収蔵庫を建設して収蔵しています。日本最初の真空管式コンピューターもあります。本館の設立時の収蔵資料は、各部局から申告された全体で166万点ですが、

大学の研究資料として展示にはむずかしいものが多いのです。そのほか美術作品など寄贈を受けたものもあります。実は豊中キャンパス自体が一つのミュージアムであると意識してもらえたらいいなと思っています。貴重な里山である待兼山の自然の中に大阪大学会館と待兼山修学館といった、いずれも昭和初期の登録文化財になっている建造物があり、アトリソースというか、構内には、国立国際美術館の中之島移転時に阪大に移された彫刻や、学校の歴史に関するモニュメントなどが置かれていて、これらを展示室で作品・資料を見て回るように結ぶことができれば、よいと思っています。博物館と大学の研究や教育というものは違うという発想の人もいて、この違いをどうするのが今後の課題です。

**中牧館長：**大学の博物館同士のネットワークがいろいろ整備されてきていますね。

**橋爪館長：**全国大学博物館等協議会は毎年、大会があります。博物科学会という学会もあり、今、大阪大学総合学術博物館が副会長館です。また、昨年「かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会」という関西圏にある11の大学ミュージアムの連携もできました。そこで、大阪商業大学と共催で「大学博物館、街に出るーこれでいいのか大阪のミュージアム」というシンポジウムを開催しました。

**中牧館長：**さまざまな連携がある中で大学の連携とは別に北大阪ミュージアム・ネットワークというのがあり、これは北大阪地域の博物館の集まりです。いろいろな博物館があつて、ネットワークを紹介するパネル巡回展やおもしろい博物館をとりあげた「こんなあんねん 地域でがんばるいろいろミュージアム」のシンポジウムがきっかけで、去年はミュージアムメッセまでたどりつきました。今年もやりたいなと思います。何かおもしろい新しい企画はないですか。

**橋爪館長：**さまざまな館があつて個性的である反面、館ごとの規模や体制、能力に大きな差があつて、そこが運営の課題ですね。

**中牧館長：**バラバラなところもありますが、地

縁の縁で集まってやれば賑わいも創出できます。観光協会もサポートしてくれています。

**橋爪館長**：「資料に直接さわれる体験」が出来るような資料として適切なものを考えるのは結構むずかしいですし、体験というところでも、うちの館はまだ充分には対応できていません。ボランティアの導入も大学の博物館はなかなか難しい。私学は割とうまくいけるんですが、これから研究しないといけないところがいろいろあります。大阪商業大学では、学校のある東大阪を中心にファンクラブがついている。「かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会」の事業では、こうした人を他館にも行ってもらうのにバスツアーをやってみる手があるということが提案されています。北大阪も隣の町へと横断するアクセスが不十分で難しい面があり、工夫する必要がありそうですね。

**中牧館長**：ミュージアムメッセの副産物として古墳つながりで、木室古墳という特徴的な古墳が吹田市と茨木市の双方にあり、シンポジウムを行いました。高槻で阿武山古墳に関するシンポジウムが行われていましたが、つながりを広げていけば古墳つながりでそういうこともできるのではないかと思います。こちらの館でも、いま古墳の展示をやっていますね。

**橋爪館長**：羽曳野にある野中古墳の展示を行っています。昔、大阪大学が発掘し、今回発掘資料を大阪大学と文化庁が費用を折半して修復したので、展示公開しています。

**中牧館長**：そういう大阪つながりということで、実施できるテーマもあるわけで、そこで、ひとつ狙っているのは、大阪画壇です。大阪画壇の再評価とか、復権とかにひっかけてネットワークづくりみたいなものができるといいかなと。吹田市立博物館では去年気比家展をやり、大阪画壇の作品を展示しました。

**橋爪館長**：大阪画壇は私の専門で、講演もさせていただきましたが、吹田市立博物館では今度は西尾家展を開催するそうですが、出陳資料はどういうものでしょうか。北大阪の庄屋をつとめたような家には大阪画壇の作品がたくさんありますね。

**中牧館長**：今度の展示は出陳作品というよりは、第11代当主西尾與右衛門さんが趣味人として持っていた美意識を展示するというコンセプト

でやろうと思っています。

**橋爪館長**：そういう古い家が何軒かあって、たまたま残してくれていて、昔はたくさんあったかもしれないけれど、なくなっているところもあって、残してくれているのはありがたいですよ。前回の中西家展の長山孔寅ながやまこういんもよかったですよね。

**中牧館長**：気比家でも金子雪操がありました。こういう知られざる人たちを世に出すという意味もあります。大阪画壇の復権にむけてネットワークを築ければいいかなと思うんですが。

**橋爪館長**：金子雪操かねこせつそう、長山孔寅などはきつとその時代には身近にあったんです。今の吹田の人は、雪操も孔寅も美術史の教科書に載ってない。誰やこれと思うだけで、本当は重要なものが身近にもっとたくさんある。地域密着型みたいなね、田結莊千里たいのしゅうせんりとかも、千里にちなんだ画家ですよ。それに今は価格が安いですね。

**中牧館長**：外国のマーケットでは安く取引されていて、情けないです。

**橋爪館長**：大阪画壇を研究するには大英博物館に行かないといけない。安価なため地引き網式に購入して、持ち帰ってから玉石の整理をおこなっています。

**中牧館長**：明治の初期はそんなふうにして日本の美術がアメリカの方に渡って残ったというのはあるけれど、今の時代も続いているという、大阪画壇にとってはゆゆしき問題ですよ。

**橋爪館長**：大阪の人は昔から、偉い人が言っているからと他の人が高く評価するものに弱い。横山大観たけうちせいほうだ、竹内栖鳳だ、みたいに思っていて、地元の近くにいる画家などを見ないという傾向があります。

**中牧館長**：大阪画壇の展示への期待やアドバイスなどがあれば。

**橋爪館長**：館としては地域と関係する中で果たさねばならない使命みたいなものもあるし、一方で、学芸員の個人の研究を最大限にやれるチャンスでもあるから、いろんな面がありますね。吹博はこれまで地道に調査研究を進めて、公開展示にこぎつけているわけで、在吹田付近庄屋家の美術と美意識なんてことで、がんばっていただければと思います。特に担当学芸員に奮起してもらいたいですな（笑）。

予告

## 企画展「さわって楽しむはくぶつかん in すいた」

会期 平成26(2014)年6月14日(土)～7月6日(日)

### 「さわる展示」の面白さ

今年も、当館にて企画展「さわって楽しむはくぶつかん in すいた」を開催します。

「さわる展示」の面白さは、実際に手でふれることで、モノの質感や形、大きさなどを触覚でとらえ、そこから複合的な情報や感動を得ることができることにあります。しかし、実は「さわる展示」の面白さはそれにとどまりません。自分自身の手を動かすことで、「創る・使う・伝える」を想像し、追体験できるところに、もうひとつの面白さがあるのです。つまり、①モノが誰かの手によって

創られた背景、②それを使った人々の文化的背景や実際の使い方、そして、③それらが博物館に収まった時に、学芸員がおこなうモノの価値付け、保存、伝達など一連の調査研究活動といった創・使・伝を想像することで、館内外で自分なりの追体験をすることが可能となります。想像力を駆使し、多視点でモノにふれる面白さがそこにはあります。

この「さわる展示」の成果は、少しずつ常設展や他の特別展にも活用され始めています。吹田市立博物館をより多くの人たちが楽しめる空間にするために、これからますます進化させていきたいと思っています。(五月女賢司)



平成24年から始まった学芸員による「さわれる常設展示解説」

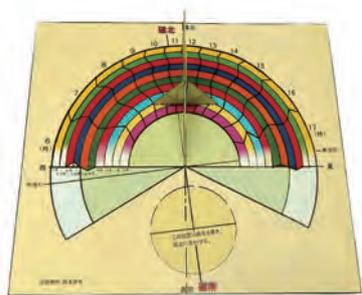
## ペーパークラフトで歴史を学ぼう 6

吹田市立博物館では平成19(2007)年以来、文化財保護の啓発を目的にオリジナルのペーパークラフトを作成しています。これまで21作品を制作しました。今回はこれらの内、NO.19～21の3作品を紹介します。なお、NO.1～18のペーパークラフトは吹田市立博物館のホームページで型紙等を公開しています。(西本安秀)



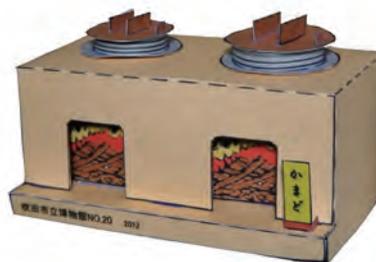
「NO.19 旧中西家住宅長屋門」

平成24年度春季特別展「大庄屋中西家名品展」の際に展示用模型として制作したものをもとに一般配布用に制作したものです。



「NO.21 日時計」

平成25年度夏季展示「あそび大はっけんーみんなで博物館へ行こうー」の際の講座「ペーパークラフトで日時計を作ろう」で活用したものです。



「NO.20 かまど」

平成24年度特別企画「むかしのくらしと学校」の際に制作したものです。

吹田市立博物館だより第57号 平成26(2014)年3月15日発行 発行 吹田市立博物館  
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL06(6338)5500 FAX06(6338)9886 ホームページ <http://www.suita.ed.jp/hak/>

この冊子は、3,000部作成し、1部あたりの単価は36円です。